

研究報告

## 子育ての理想と現実

### —「楽しく子育て」を目指して—

植田ひとみ<sup>1</sup>・今田陽子<sup>2</sup>

#### はじめに

かつて、「こんにちわ赤ちゃん」という歌が大ヒットした。わが子の誕生を迎えた親の感動と、子どもの健やかな育ちを祈った歌である。まだ子どもだった筆者には、親としての気持ちなど到底わかるはずもなかった。が、それでも赤ちゃんの誕生が、親子のふれあいが、とても素敵なこととして子どもの心にも響いていたように思われる。実際、世の親は、大抵の場合、親になる喜びに満ちてわが子を迎える。そして、わが子のために祈る。ところが、この満ち足りて穏やかな状況は、そう長くは続かないようである。

ここに、社団法人広島県看護協会が実施している赤ちゃん電話相談の報告書（1995年度）がある。相談実数については1990年から1994年の年次推移が示されているが、相談件数が年々増加しており、1994年には3532件ある。これは1990年の約1.6倍になる。この数値をどうみるか。少なくとも、ここへの相談者は一部であり、その背後にも子育てに悩む親が相当数いると考えられる。さらに、同報告書には、相談者および子どもの出生順位も記されている。相談者については、不明を除くと、なんと97.4%が母親である。また、子どもの出生順位については、第一子が81.3%を占めている。このように、初めて子どもを得た親は（親といってもほとんどが母親であるが）、子どもが生まれて間もない頃から悩み始めている。「もっと楽しくやっていきたい」「こんなはずじゃなかったのに」という母親の声も聞こえてくる。

母親はなぜ悩むのだろうか。一体何を悩んでいるのだろうか。子育ての悩みは、乳児期に限ったことではない。幼児期以後も続く。悩むことが続くと苦しくなる。あんなに感動をもって迎えたわが子の誕生なのに、わが子とのふれあいにあんなにときめいていたのに、子育てが楽しくなくなる。苦しみにさえなることもある。一方、こんな例もある。筆者の所には時々、子育て真っ最中の卒業生が遊びに来る。先日、三児の母となり、目下育児休業中という卒業生（31歳）が、同級生と泊まりがけでやってきた。お下げにした髪にはカラーバンドがかわいらしく、ミニのピンクの上下に花模様のブラウスが春を振りまいていた。飲み、食べ、話し、歌い、踊る。学生時代、自分の周りには若い男がいないと嘆いていた彼女は、今、三人の息子と夫に囲まれて、目尻が下がりっぱなしである。子育てが楽しくできるか否かは、親だけの問題にとどまらず、親子関係にも大きく響くであろう。楽しく子育てすることが、円満な親子関係を創り出すと考えている。では、子育てが楽し

くできるか苦になるかは、一体何によって違ってくるのだろうか。どうすれば楽しく子育てできるのだろうか。

そこで本研究では、子育てを楽しめなくしている要因を、部分的ではあるが明らかにすることによって、楽しく子育てするための手がかりを見い出すことを目指した。そのために、母親を対象にした子育てに関する意識調査を行った。その調査に本音で答えてもらえる関係を創るために、現在乳幼児を子育て中の母親が主催する育児サークルに参加した。22名と少人数ではあったが、母親の本音にふれることができた。また、母親予備群（学生）の声、あるいは異文化における子育てからも、楽しく子育てをするためのヒントを得ることを試みた。

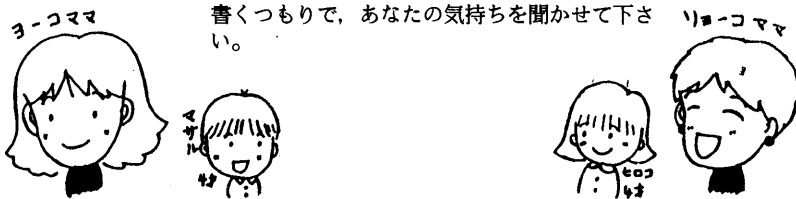
## I 子育てに対する母親の意識

### 1 調査概要

本調査は、「母親」をあるいは「子育て」を、母親自身がどのようにとらえているかをみようとしたものである。育児サークルのメンバー22名にご協力いただいた。方法は、4コマ漫画を5場面描いた調査紙（資料1参照）を作成し、それに対する意見・感想を自由に書いてもらった。この漫画には、タイプの異なる二人のママが登場する。心配症のヨーコママと、楽天家のリョコママである。ヨーコママには4歳のマサルが、リョコママには4歳のヒロコがいる。この二人のママが、①一泊旅行、②自分の時間、③夜遊び、④子育て情報、⑤よその子、をめぐってやりとりする。これら5つの場面に描かれた二人のママの考え方・言動についてどう感じたか、「二人のママへの手紙」という形で思うままに書いてもらった。調査実施は1995年である。

（資料1）

私たちは、二人とも子育て真最中のママです。  
ヨーコママとリョコママをみて、あなたが感じたこと、思ったことを聞かせてください。  
共感、反感、何でも結構。二人のママに手紙を書くつもりで、あなたの気持ちを聞かせて下さい。



1.



2.



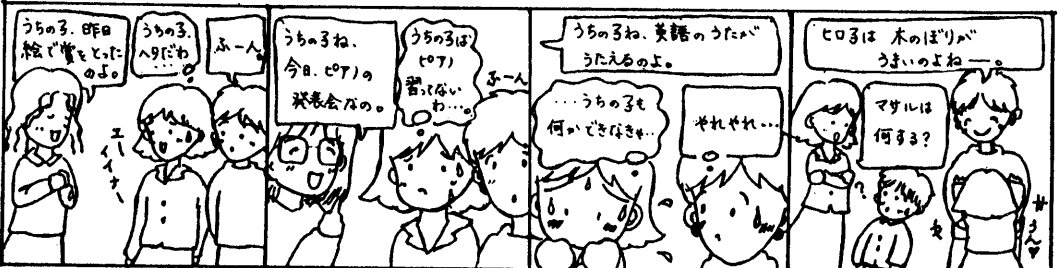
3.



4.



5.



## 2 母親の声から描く母親像

### ・子どもにとって一番の存在

夫に子どもを預けて一泊旅行に出かけたり、夜遊びに出かけることについてはどのように見ているのだろうか。彼女たちは「息抜きは必要である」とは思っているが、それは「たま」のことであり、やはり気が引けると言う。父親である夫に子どもを任せることに、遠慮しているのである。逆に、夫に任せることに不安を感じて、出かけるのをためらっている者もいる。オムツも替えられないのでとても外泊はできない、という声もある。が、できるようになってくれと、夫に要求はしない。また、夜飲みに出かけるなど母親にはとんでもないことだという見方もある。父親（夫）なら日常的なこととして認めることなのに、自分自身（母親）には許そうとしない。夫に甘く、自分に厳しい姿がそこにある。あるいは、自分だけが楽しむよりも子どもや夫と一緒に楽しみたいという傾向が母親にはあり、子連れでカラオケ通いの者もいる。母親にとっては息抜きといっても、子どもから開放されることではないのだろうか。

### ・献身的

母親が自分の楽しみの時間を持つことについて、どう思っているのだろうか。結果は、母親が趣味を持つのは「わがまま」であり、そのためにわが子を預けるのは安易であり、「子どもが小さい間は無理」といった見方である。父親である夫が趣味に興じることは受け入れているのに、母親（自分自身）には認め難いようである。なぜ母親だけが「わがまま」と見られるのだろうか。子どもを産むことができるか否か以外に、父親と母親にどのような違いがあるというのだろうか。また、「子どものことを第一に思うのは親として当たり前」とも考えているが、はたして子どもは親の全てにおいて優先するものなのだろうか。

### ・教育過敏

情報化の波は当然子育ての分野にも及んでいる。育児書だけでなく、テレビからもどんどん流され、講演会・学習会も盛んに行われている。そんな中であって、母親はどう対処しているのだろうか。回答をみると「育児書通りに育っていないと不安になる」し、「子どもによって違ふとわかっていてもつい比べてしまう」し、「個人差という言葉は一種のなぐさめのようなもの」であるといった声があがっている。気にすまいと思っても気になるし、それでもなお、より良い子育てをと情報を求めている母親の姿が浮かんでくる。父親もこんなに子育て情報を求めているだろうか。

さらに、母親の教育熱は、よその子どもによってもかき立てられるようである。「公園でいろいろな子どもたちを見ると、つい、うちの子もそろそろ早期教育したほうがいいかな」と思ったり、「トイレトレーニング中には友人の話にあせって、子どもにあたってしまったり」している。比較したくないと思いつつも比較してしまい、それによってあせりや不安が生じ、さらにそのイライラをわが子にぶつけてしまう母親の姿が描き出されている。母親がこんなにわが子の発達や

教育に心を砕いていることを、父親はどう受け止めているのだろうか。心ならずも子どもにあたってしまっている母親の辛さを知っているのだろうか。夫婦の間のコミュニケーションに目を向けずにはいられない。

### 3 母親が子どもを見る目

#### ・意識と言動のズレ

母親がわが子をどのようにとらえているかみてみよう。「一人の人間として接していこうと心がけている」が、「親の理想を押しつけて、先走った行動をしてしまいがち。これはわが子を所有物として扱い、一人の人間としてみていない」のが現実の姿のようである。また、「子どものことを考えていたつもりだったが、親が引いた線路に子どもを乗せようとしただけだった」という声もある。このように、わが子は親の所有物ではなく一人の人間だということは、母親の頭にはある。しかし、それがまだ十分には根付いておらず、実際には「親の愛」や「子どものため」といったことばで覆って、子どもの人格を無視した言動を行いがちである。この意識と現実の自分の言動とのギャップに母親は気づき、悩んでいる。しかも、子どもの人格を認めない限り楽しく子育てはできないことに気づいている者でさえ、なかなか思うように実践できないでいる。「わが子」に関わる難しさを物語っているといえよう。

#### ・愛から欲へ

子どもに対する母親の思いは、子どもの年齢とともに変化する。それも、時には正反対の方向に。出産後1年8ヵ月で次のように叫ぶ母親もいる。「リョーコママになりたい／子どもを産むまでは勉強なんていい。身体を鍛えて元気な子がいいと考えていたのに、今ごろは、うちの子もそろそろ早期教育した方がいいかなと思ってしまう。英語は早く聞かせておいた方がいいと聞くと考えてしまう。自分も英語はしっかりやっておいた方が良かったと今になって思うから」と。あるいは、「母親になる前は、そんな小さなことどうでもいいじゃないかと思っていたことも、わが子のことになると小さなことでも気になるようになってしまった」という声もある。子どもへの愛が、いつの間にか親の欲にすり変わってしまっているように思われる。

### 4 母親にとって子育てとは

#### ・大変で難しい

子育てを母親自身はどのようにとらえているのだろうか。寄せられた手紙から拾ってみよう。「育児って本当に大変ですよ。親の関わり方ひとつでその子どもがどう伸びるか左右されてくるし」、「一人の人間を育てることはなんと大変なことだろう」とある。母親のため息まで聞こえてきそうである。母親にとって子育てとは、「はじめから」あるいは「頭から」とにかく「大変なこと」としてとらえられている。なぜ、そう思うようになったのだろうか。「大変」の中味は

何なのだろう。それは、母親だけが負わねばならないことだろうか。

・悩みはつきもの

大変で難しいと感じている子育ての中であって、母親は健気であり、謙虚であることが次の手紙から伺える。「リョーコママのように、あっけらかんとおおらかに子どもを見られるお母さんになりたいと思うけど、きっとヨーコマママみたいに、たくさん悩んだりするんだろうな。でも、それはそれで自分自身の成長になるだろうし、そんなふうに悩むから見えてくるものがある」と考えている者もいる。子育ては大変だからこそ、悩みはつきものとしてとらえられている。しかし、そうは思いながらも一方で、母親は「なぜ、私はこんなに悩むのか」とさらに悩み、「楽しく子育てしたいのに」という思いをつのらせている。何を悩んでいるのか、それを明らかにする必要がある。

・専念に値する重大事

「子育てって奥が深いし、片手間にできることではないと思う」、「一生のうちの数年間を子育てに専念できるということは、とても貴重な体験だと感じています。一度しかないこの子育ての時期をもっと楽しみたい」という声もある。親としての責任感と、親なればその楽しみをひしひしと感じているのが伝わってくる。そんな中で、「専念」という言葉に目が止まる。広辞苑によると、「心を一つのことに集中すること」とある。ここでの一つのことは、「わが子」になろう。わが子を大切に大切に思う母親の気持ちを察する一方で、疑問がわく。一から十まで子ども中心、子ども最優先の生活になるのだろうか。そうすると子どものことばかり考えて、母親の頭は常に子どものことで一杯になりはしないかと心配になる。またそのような「専念」の子育ての時期は、一体何年続くのだろうかとも考える。

## 5 揺れる母心

・理想と現実の大きなズレ

二人のモデルママへの手紙から、母親が、こうありたいと願っている母親像と現実の自分の姿との間に、大きなズレを認めていることがわかる。「多分、大半のママがリョーコママのようになりたいと思いつつ、ヨーコママに近い状態なのではないでしょうか」、「ヨーコママというのは、わりと多いタイプなのではないでしょうか」、「気持ちとしてはリョーコママになりたい!」 「ヨーコママはもう少し子離れた方が…とは思うけど、私もどちらかといえばヨーコママ派かな?」といった声が寄せられている。意識としてはリョーコママのようなおおらかな子育てをしたいと思いつつも、実際にはヨーコママのような気にし過ぎる子育てになっている。これが、子育てにおける「理想」と「現実」ということであろうか。ここで母親は、理想は理想と割り切ることもできず、頭のどこかであって、時に現実の自分を責めているようである。しかしだからといって、自己に強く変革を迫るわけでもないように見受けられる。理想を仰ぎながらそうはなら

ぬ現実にいる母親の苦しさを察しながら、こうはしたくはないと母親自身が思っていることをさ  
れている子どもは、もっと辛い思いをしているのではないかと案じてしまう。

・将来のズレに対する不安

母親は「今」ある理想と現実のズレに悩むだけでなく、これから「先」の母親としての自分の  
姿にも不安を抱いている。例えば、「私の娘は1歳5ヵ月で、まだまだ赤ちゃんですが、きっと、  
4歳頃になるとヨーコママのようになってる気がします。…リョーコママのように、あっけらか  
んとおおらかに子どもを見られるお母さんになりたいと思うけど、きっとヨーコママみたいにた  
くさん悩んだりするんだらうな」というように、将来の母親としての自分に、はや不安を抱いて  
いる。リョーコママのようになりたいと思いつつ、そうなるという姿勢を持ってないでいる。  
そうさせる現実の力があるのだろうか。しかし、望まない母親になる危険性を感じるなら、なお  
のことそうならないよう心がけたい。望まぬことをして悩み苦しむよりも、望む姿に少しでも近  
づく努力をする方が、ずっと楽で心地よいだらうから。

## II 異文化における子育て

### 1 民族によって異なる子育て観

原ひろ子の『子どもの文化人類学』という書物は、衝撃的におもしろい。何がそんなにおも  
しろいかというと、日本ではとんでもないことが、ある世界では、当たり前のこととしてまか  
り通っている点である。子育てに関わって、いくつかを簡単に紹介したい。

ヘアー・インディアンは子育てを楽しんでいる民族だという。彼らには、「はたらく」「あそ  
ぶ」「やすむ」という区別があるが、子育ては「あそび」のカテゴリーに入るのだそうだ。子  
どものすることや、成長するようすを眺めることで、「子どもに楽しませてもらっている」と  
感じているらしい。また、彼らは、幼い子どもであっても、「一個の独立した人格」としてと  
らえ、さらに「人が人に忠告したり、命令したりすることはできない」という考え方をもち  
ている。そこでは育て方によってその子どもの将来が決まるという考えはなく、「人の将来は  
その人自身で切り開くもの」と考えられているそうである。さらにそこでは、「教えてあげる」  
という概念も、「教えてもらう」という概念もなく、あるのは「自ら学ぶ」のみであるという。  
したがって、子どもに何かを教えなければならないという意識は、親には全くないというので  
ある。

イスラム教徒の子どもは、母親の保護や干渉を受けることができない。それはイスラム教で  
は、成熟した女性がむやみに家の外に出るのを禁じているからである。外にでることができな  
い母親は、外遊びを始めた子どもの様子を見ることができない。しかしそれが母親にとって辛  
いことでもなく、子どもも淋しい思いをするわけではないようだ。

「子どもをかわいく思って当たり前」「母親は子どもが好きである」という考えを持っていない文化もある。ニューギニアに住んでいるムンドグモル族には、「子どもを嫌う」文化があるそうだ。そこでは、「子どもは邪魔もの」として育てられており、容易に子どもを捨てたりすることもあるらしい。ここでは母親は、「いやいや子育てしている」のである。しかし、「子どもを嫌う」文化を持っていても、子どもを産まないわけではなく、むしろ一族の繁栄のために、子どもを欲しがらるそうである。

ウガンダの北方で、ケニアとスーダンの国境地帯のモンゴレル山地に住むイク族には、次のような文化があるそうだ。イク族の生活している土地は、とてもやせており、食べ物を得ることが困難である。そのような中で子どもは、とても邪魔で足手まといな存在でしかない。そのため、彼らは子どもが3歳になると、食べ物を与えなくなる。子どもは、自分で食べ物を採さなければならなくなる。このような中で育つ子どもは、親の愛情を求めたりすることなく、自分の力で生きていこうと努力するのである。

## 2 他民族から学ぶこと

### ・育児は大変な仕事？

子育てを「あそび」ととらえるヘアー・インディアンは、子どもに「何かしてやる」意識がないという。日本の場合、この「何かしてやる」意識が、極めて強いのではないかとと思われる。今回の調査結果でも示されたが、一般的に日本人の多くは、子育てを「大変な仕事」だと考えている。それは、子育てを、親が子どもにさまざまなことをしてやること、ととらえているからではないだろうか。子どものためには、あれもしてやらねば、いやこれもあるとなると、どんなに大変か察しがつく。しかも人間の欲望は果てることがない。子どものためといいながら、実は親の欲であることが多い。この「してやる」意識がある限り「大変」から解放されないのではないかと考える。親がしてやろうとすることの、一体どのくらいが子どもに本当に必要なことなのか、問うてみる必要があろう。

### ・子どもの人権

ここでみてきた民族では、自分の子どもに自分の思いを託すことはしない。それは、「その子にはその子の人生がある」と考えるからである。そこには、子どもを親の分身として見る目はない。日本ではどうだろう。調査結果にも表わされたように、わが子に対して、「こうあってほしい」と、親の気持ち、親の価値観を押しつける傾向が強い。あるいは、心配の種を取り除こうと、転ばぬ先の杖を用意してしまう。すなわち、子どもの発達のチャンスを奪ってしまうことになる。「子どもは親とは別人格」、「子どもには子どもの人生がある」という言葉を親はよく口にする。しかし、「子どもの人権」に対する親の意識は高いとは言えないと感じている。



・親はなくとも子は育つ

子どもについて考える時、私たちは「養育者が絶対に必要である」と考える。なぜなら、幼い者は、その社会に適応するよう、誰かに養育され、教育されなければ生きていけないと考えるからである。しかもその養育者は、子どもが幼ければ幼いほど、親、特に母親を必要とするように考えがちである。こんな風に考えていいのか、子どもが生きていくのに、それほどに親は重要な存在なのかどうか。それを考えさせてくれたのが、イク族の子育て観である。彼らは、子どもが一定の年齢になると、養育することをやめ、子ども自身が生きていけるよう努力せざるを得ない状況にする。その中で、子どもは自分で生きていく術を身につけ、命をつなげていく。このようにしても、子どもは自分自身で生きていくことが可能なのである。むしろ、これは極端な例ではあろう。しかし、ここに、人間本来の「生きようとする力」をみる。私たちは、「子ども自身が」「自分の力で」「自分を」生きようとする前に、子どもに力を貸してしまっているように思う。子どもが自分の力で自分を生きることを侵していないか、常に注意のいるところである。

また、ヘアー・インディアンは、子ども一人ひとりについて、その子の親だけでなく、おとな全員で見ている。子育てを民族全体で行っているといえよう。「子どもをいろいろな人の目で見ること」「多くの人が一人ひとりの子どものことを知っている」ことは、子どもが育っていくとき、非常に重要なことである。日本でも、「社会全体で子育てをしよう」というスローガンは掲げられている。しかし、実際は、スローガン倒れになっているように感じられる。日本の社会では、まだまだ親の責任が厳しく問われる。この「親の責任」が親にプレッシャーをかけ、「私がかんとかしないと」と親に思わせる。その結果、親は子どもを何とかしようとして、子どもの生を侵してしまうことになる。親の責任とは何だろう。それはいつまで、またどこまでを言うのだろうか。子どもが育っていくとき、むしろ他人のほうがいい場合がある。自分の子どもは人に（社会に）育ててもらっておとなにしてもらおう。そのかわり自分は人の子の育ちに力を貸す、そういった社会的子育てを提案したい。

### Ⅲ「楽しく子育て」を目指して

本研究は、悩む母親に目を向け「母親の声」を基に展開したささやかなものである。が、調査結果から、あるいは異文化における子育て観から、楽しく子育てができるようになるためのヒントをいくつか掴むことができた。最後にまとめとして、「思い込んでいないだろうか」と問いかけて、本小論を閉じることにしたい。

私たちは、日本の文化の中で「親なら子どもにこうしてやらなければ」と思い込んでいることが、多々あるのではないだろうか。こうやってさまざまな文化に触れると、その思いを強くする。

子どもはどのような環境においても、確実に生きていくことができる。生あるものには、その生を生きる力が備わっていると考える。したがってその力を侵さないこと、邪魔しないことが第一であろう。そして次にその力を十分に発揮できるように、必要な時に、必要な力を貸せばいいと考える。子どもにより良い人生を送らせてやりたいから、だからさまざまなことをしてやるのだと言われるだろうか。しかし、そのより良い人生も、思い込みかもしれない。親が考えたものとは違って、親の考えたものよりずっとその子にふさわしい人生を、子どもは創り出すこともできる。親の愛について、親の責任について、思い込んでいないかあるいは、親本位になっていないか。常に自問する姿勢を願ってやまない。

誰もが、楽しく子育てしたいと願っている。特に母親の場合、現状では子どもとの関わりが多いため、より強く「楽しく」を願っている。そこで気づくのは、楽しく子育てしている民族の子育てには、「こだわり」がないように思われる。が、今回の調査でも明らかになったように、日本の母親はこだわりをもっている。「この時期にはこれができなければ」、「あの子にできて、なぜうちの子にできないのだろう」など、子育てのさまざまな場面でこだわる。「こだわる」のは、それはとりもなおさず、「思い込んで」いるからではないか。「こだわり」を捨てることができれば、「思い込み」を解消できたら、すなわち子どもを「あるがままに」受け入れることができれば、子育てがどんなにか「楽」で「楽しく」なるだろうと思う。

(1. 本学初等教育学科助教授・運営委員 2. 本学初等教育学科12期生)

#### 参考文献

- 原 ひろ子 『子どもの文化人類学』 晶文社 1979
- 橘 由子 『子どもに手を上げたくなる時』 学陽書房 1992
- トマス・ゴードン著 近藤千恵他訳『ゴードン博士の親に何ができるか  
「親業」』 三笠書房 1990
- 品川 孝子 『親がしついで迷うとき』 あすなろ書房
- 社団法人広島県看護協会赤ちゃん電話相談『赤ちゃん電話相談実施報告書 平成6年度』 1995